

## 「山陰地方の縄文時代」を聴いて

聴講日：H31.5.11  
むきばんだやよい塾第20期

### この40年間で変化した縄文時代の研究

1980年以前は、「社会は、狩猟採集・移動生活(旧石器・縄文時代)から、農耕・定住社会(弥生時代)へと変化し、やがて国家の誕生(古墳時代)へと変化する(マルクス主義史観=社会の発展史観)が主な考え方で、「貧しい縄文時代」観が主流でした。

一方で、1960年代に人類学による先住民研究が進展したことにより、狩猟・採集民は地域の資源を有効に利用し、決して食料に困窮していたわけではなく、食料に瀕していたというのは、西洋を中心とした現代の研究者の先入観に過ぎなかったことが明らかになってきました。多数の住居跡や大規模な貝塚・土偶などの優美な造形物から「縄文時代は原始の豊かな社会」と考える研究者が増えました。そして1980年代から一般歴史書で紹介されて、縄文時代が「原始の豊かな社会」との認識が広まりました。

“縄文時代には植物の栽培は行われなかった”とされてきましたが、次のような知識や試料の蓄積および技術革新が栽培植物の発見に寄与して時代観の変化を促しました。

- ①低湿地遺跡の発掘が増加し、植物種子に対する興味・知識が蓄積されてきた。
- ②微細資料の検出技術が確立・普及し、微細な種子が回収されるようになった。
- ③土器に付いた圧痕分析技術が確立し、種子圧痕が認識されるようになった。

縄文時代の植物栽培としては、マメ・ヒヨウタン(約7000年前まで遡る)、コメ・アワ・キビ(約2800年前以後出現)、エゴマ・シソなどが確認されています。しかし、これらの植物は遺跡単位で単発的な出土で、短期間の継続はありますが世代間での継続はないし、地域的展開もありません。したがって、縄文時代は基本的には採集・狩猟によって生活しており、食料の一部が補完的に栽培されていると考えられ、「農耕社会」には達していないと認識しています。でもこれは定義付けの問題なので、将来変化するかもしれません。

### 山陰地方の縄文時代

縄文時代前期(約7000年前)に寒冷気候から温暖気候へと環境が変わり、その結果現在と同じ気候になるとともに、「縄文海進」(約11500年前～5900年前)と呼ばれる海水面の上昇、海岸線の後退があり、現在と同様な地形・自然が形成されました。日本海が誕生し、四季が発生して針葉樹林帯から照葉樹林帯に変わり、ラグーン(潟湖)と沖積平野が形成されました。関東などでは、小林達雄氏が提唱する“縄文モデル村”と呼ばれるような遺跡が発掘されています。広場の周りを、円形に手をつなぐようにして家を取り囲み、広場は社会的な行事、あるいは共同作業、祭りや宴会、話し合いの場所にもなったのでしょうか。このような広場は全ての村にあったわけではなく、地域の中で群を抜いて安定し、継続的にずっと続いていたような村にありました。

鳥取県智頭枕田遺跡や、島根県志津見ダム・尾原ダム建設予定地内で、遺跡全面が発掘調査され、縄文集落の全貌が明らかになることが期待されましたが、“縄文モデル村”と呼ばれるような環状集落は出土しませんでした。縄文モデル村が適用されるのは東日本のみで西日本には環状集落は基本的にないようです。

山陰では一つの遺跡で住居跡2～3棟出れば多いほうで、まったく検出できない遺跡も多いですが、一つの遺跡で集落が完結しているのではなく、複数の遺跡で集落を構成しているとすれば、集落全体では10棟前後の住居数が想定でき、集落の維持も可能となってきます。山陰地方の縄文集落は、このような散在型集落と考えられます。

縄文時代の人々は、自然に生息・着果する動植物を基本的な食料とし、シカやイノシシなどの大型動物だけでなく、ヘビやカエルなどの小動物も食していました。また、四季折々の植物(ドングリ・ユリの根茎・山菜など)と、沿岸や河川の魚介類も貴重な食料資源としていて、食べることができるものは、すべてを利用していたように思われます。ただ、シカやイノシシなどの大型動物は食料獲得の確実性に欠けることから、資源としては植物資源や沿岸・河川の魚介類より劣るのではないかと考えられます。

## まとめ

浜田市～広島市の付近で広域土器型式圏の境界が存在しています。広域土器型式圏内では細部の違いがあっても、全体的に同様な土器の変遷をします。広域土器型式圏内では強い結びつきがあったと考えられ、一つの広域土器型式圏内は「世界」が共有されていたのではないのでしょうか。

広域土器型式圏内ではさらに複数の小地域土器型式圏に分かれます。中国地方東部では、山陰地方東部域・同中部域・瀬戸内地方東部域の三つの小地域に分けられます。小地域土器型式圏内は直接会うことができる範囲で、頻繁に交流していました。山陰中部域では七つ～九つのムラがありました。また、小地域土器型式圏同士は物資・情報の交換が行われていたと考えられます。

出土遺跡数やカルフォルニア先住民の民族例から類推すると、縄文時代の最盛期(中期)に約25～30万人が列島内に住んでいたと推定されます。一方、カルフォルニア先住民の人口と面積の比から山陰中部域の人口を計算すると約4300人となりますが、出土している遺跡数から算定すると、700～800人程度となり、列島内には人口の偏在があったようです。